

# 大山寺僧坊跡発掘調査成果Ⅷ

## 遺物から見る僧侶たちの生活

今回は、遺物から見た大山寺僧坊の交易についてご紹介しました。今回は、遺物から見える僧侶たちの活動の一端についてご紹介します。

## 僧侶たちの宗教活動

最も僧坊跡らしい遺物として、青銅製の匙さし、六器台皿ろっきだいざら、碗などの仏具があります。青銅製匙には柄の差し込み口があり、その中に木製の柄の一部が残っていました。匙の内面には幾何学文様が刻まれていました。これは護摩ごまを焚いた時に、お香や五穀などを火に投げ込むための護摩杓ごましやくと考えられます。大山寺は祈禱を行う寺であり、有



仏具類



青銅製匙（護摩杓）

青銅製裝飾具

力者から寄進を受けて国家安寧や戦勝祈願など、さまざまな祈禱を行っていました。この青銅製匙は、まさにその祈禱の際に使用されたものと考えられます。

青銅製の碗と台皿はお供え物を盛るための仏具です。台皿と碗は高熱を受けて無残に溶けています。このことから、火災にあったことが推察されます。

## 近世文書からの考察

『大山西楽院年中行事』という近世

の古文書の写しがあります。これは大山寺本坊であった西楽院に関する年中行事や租税の徴収法を記したものです。この中に「護摩堂並諸靈壇に供物を捧ぐ」「護摩堂にて積尊に献供あり」「精霊壇に献供あり」など、僧侶たちが護摩堂や霊壇にお供え物をする行事が多く記されています。

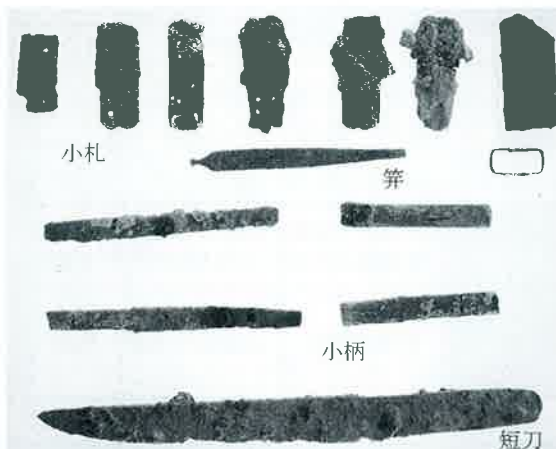
J-14 僧坊跡が僧坊として機能していた時期とこの書物が書かれた頃とはかなり時期差がありますが、出土遺物と古記録とを併せて考えると、J-14 僧坊跡内にも少し小さな護摩堂や霊壇などがあつて、そこで僧侶たちがお供え物をし、護摩を焚くなどしていたのではないのでしょうか。

## 僧兵の存在

甲冑かっちゆうの一部分である小札こざわや、短刀などの武器も出土しました。当時は多くの人々が護身用として短刀を持っていたといわれています。小札は、革ひもなどで綴じ合せて鎧よろいにするための部品です。長さ5 cm前後、幅2〜3 cmほどの鉄板であり、10個前後の孔が開けられています。これは僧兵の存在を雄弁に物語る遺物です。『大山寺縁起繪巻』

には、僧兵らが神輿みこしを担いで上京し、訴えをおこした場面があります。そこには袈裟けさの下に鎧をつけた僧兵たちの姿が描かれています。ほかに刀装具

である小柄こづか、刀の飾り金具、筭そろが出土しました。小柄は切り出しナイフのようなものであり、筭は髪を整える際に



武器類

## お茶の文化

使用する装身具です。僧侶がこれとどんな風に使ったのか、興味深く思います。出土した飾り金具は、長さ3 cm、幅1.5 cm、厚さ0.2 cm、重さ3.4 gの小判形をした青銅製品で、表面に9個の巴文とらやなぎを鑄出いしてあります。刀の鞘尻さやじりや束尻ふさじりを飾ったものと考えられます。

お茶の文化を物語る遺物として茶臼ちまうすや天目茶碗てんもく、風炉ふうろなどがあげられます。茶臼はお茶の葉を挽く臼であり、風炉はお湯を沸かす道具です。また、出土した天目茶碗は中国製であり、当時は唐物からものとしてもはやされました。